

## はじめに

英文であれ、日本文であれ、それを母国語とする人間は意識こそはしていないが、何がしかの文法に従って喋ったり書いたりしているのである。残念ながら、外国語を学習する際には、文法を意識することは避けて通れない。巷には、「日本の英語教育は文法ばかり教えているから生徒が英語嫌いになり、英会話のひとつもできない」という批判があるが、それは「公式ばかり教えているから数学が嫌いになる」と言っているようなもので、ナンセンスとしか言いようがない。「公式を覚えられない数学教育」は成果を見るのであろうか。「文法を意識しない英語教育」は、低次元の英会話だけやっている分には可能かもしれないが、英作文という名の付く学習においてはあり得ないことである。文法的なことが間違っている文はすべて誤文、すなわち、そもそも文として認められないのである。文法を意識しない英作文教育などあり得ないということだ。

とは言え、先ほどのような世間の文法教育批判にいくばくかの理があるとなれば、英文法を「英文法という科目で教える」ことにあるのかもしれない。確かに、はなから英文法書を渡され、それを隅から隅まで読んだところで何も身に付くまい。文法力は実際に英文を読んだり書いたりしながら身に付くものであり、理論先行型の教育では習得がおぼつかない。簡潔に申さば、「**英作文を勉強してはじめて文法がわかる**」ことが多いのである。さらに、文法書の類に書かれている文法用語自体が学習者に誤解を与えているとも考えられる。例えば、「現在形」は「現在のことを表す」とか、「過去形」は「過去を表す」といった勘違いである。今、これを読んで「現在形は現在のことを表さないのか?」「過去形は過去のことではないのか?」と思われた方は、ひょっとしたらその辺が英作文にいまひとつ自信が持てない要因なのかもしれない。

本書は、そうした従来の英文法教育の問題点を克服し、自然な英文が書けるようになるための新たな英文法学習法を提示したものである。**使えてこそはじめて英文法を学習する意味がある**。本書の和文英訳を通して、生きた英文法を体感し、作文力の向上につなげていただきたい。

2010年6月

小倉 弘